関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム

データスチュワード型人材育成プログラム 第 2 回 開催報告

2026 年 9 月 18 日(金)開催

1. 開催概要

行事名	関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム データスチュワード型人材育成プログラム 第 2 回
テーマ	研究公正と研究データにまつわる ELSI
日時	2026 年 9 月 18 日（金）13:00〜17:30
会場・形式	京都大学百周年時計台記念館（国際交流ホール III）
主催	関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム
参加者	受講者 21 名、講師 4 名、運営スタッフ 4 名
講義・演習	講義：田中智之氏（京都薬科大学）→榎本啄杜氏（大阪大学）→井出和希氏（大阪大学）→長門裕介氏／ワークショップ

2. 開催目的と概要

全 6 回で構成されるデータスチュワード型人材育成プログラムの第 2 回は、研究公正と研究データにまつわる倫理的・法的・社会的課題(ELSI)を扱った。前半では、生成 AI の普及や論文工場の問題を背景に、研究の信頼性を支える実験記録と研究データ管理の意義を検討した。続いて、ELSI の論点を研究の各段階に沿って整理し、公開・共有・非公開の判断に関わる具体例と、公開の範囲や条件を調整する方法を学んだ。講義後には、受講者が研究データに関する課題と対応を考えるワークショップを実施した。

3. 講義・演習概要

(1)生成 AI 時代の研究の信頼性

京都薬科大学　田中 智之氏



田中氏は、科学研究の共有性や批判的検討の規範、責任ある研究・イノベーションの考え方から、研究の信頼性を論じた。ねつ造・改ざん・盗用(FFP)に加え、疑わしい研究活動(QRP)や論文工場、生成 AI による不適切な論文の大量作成を取り上げ、論文数等の評価指標が不適切な行動を誘発し得ることを示した。また、実験記録が残されているかどうかが研究不正調査で重要となる事例を紹介した。論文と元データの紐付け、研究方法・解析手順の透明性、正確な記録は、成果を後から検証する基盤となる。研究データ管理を研究室やプロジェクトの日々の実務として捉える必要性が示された。

(2)研究データにまつわる ELSI の基礎

大阪大学　榎本 啄杜氏

榎本氏は、ELSI を法令への適合だけで完結する課題とせず、研究参加者の権利、利益と害、公平性、社会的信頼まで含む判断として整理した。プライバシーと再識別、同意と二次利用、コミュニティへの影響、契約、アクセス審査、データの質や来歴などの論点は、研究の企画から保存・公開、再利用、事後の見直しまで関わる。データスチュワードの役割として、相談の背後にある論点を発見し、関係者・目的・不確実性を整理した上で、判断主体と専門部署につなぐ流れが示された。誰が、どの理由と条件で判断したかを記録し、後から見直せるようにすることも重要である。



(3)ELSI の具体例と公開の選択

大阪大学　井出 和希氏

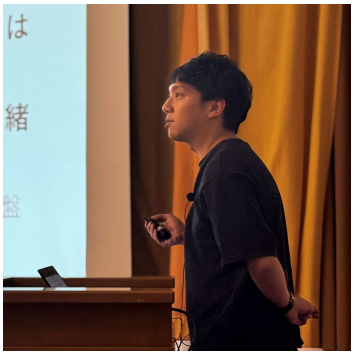
井出氏は、データマネジメントプラン(DMP)における管理対象データと、公開・共有・非共有／非公開の選択肢を確認した。DMP は研究の進行に応じて見直すものであり、非公開にも合理的な理由があり得る。講義では、フィールドデータを文脈から切り離すことによる影響、プレプリントの質を保つための投稿審査、公開データが生成 AI によって安易に分析されることによる誤用、否定的な研究結果の共有の難しさが取り上げられた。公開する際の説明やメタデータを充実させる方法、利用者を限定する方法など、公益性とリスクの双方を見ながら研究者と検討する必要性が示された。



(4)公開性の段階と判断方法

大阪大学　長門 裕介氏

長門氏は、「公開か非公開か」という二択を越え、完全公開、条件付き公開、申請制アクセス、メタデータのみの公開、非公開という段階を示した。インタビュー記録では協力者の同意や語りの文脈、希少種の分布地点では位置情報の解像度、企業との共同研究では契約上の秘匿期間に着目した。データの粒度、利用者、公開時期を調整すれば、必要な保護を行いながら利用可能な情報を残せる場合がある。支援者には、リスクの由来を特定し、制限が見合っているか、より制約の少ない方法がないかを研究者と確かめ、採用しなかった案も含めて判断理由を DMP 等に記録することが求められる。



(5)ワークショップ

講義後、受講者が研究データに関する課題を持ち寄り、解決に向けたアプローチを検討するグループワークを実施した。ワークショップ資料では、「どんな立場で」「どんな時に」「どんな課題があるか」を明らかにして課題を共有し、対応が難しい点も含めて議論した。

4. 第 2 回を通じて共有された視点

1. 研究の信頼性を支えるには、成果の公開だけでなく、データの取得・整理・解析の経過と判断理由を後から確認できる記録が必要である。
2. 公開・共有・非公開の選択では、法令や契約に加え、研究参加者やコミュニティ、将来の利用者への影響を考え、利用者・情報の細かさ・公開時期を調整する。
3. データスチュワードは一人で最終判断を担うのではなく、論点と条件を整理し、研究者と適切な専門部署をつなぎ、理由を説明できる判断を支える。

作成：関西地区研究データ管理人材育成コンソーシアム事務局